

能登ミニトマト現地検討会資料

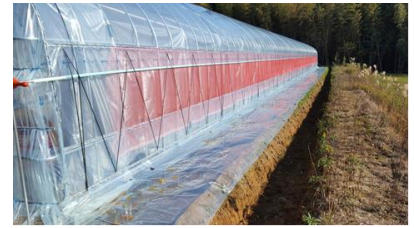
令和2年6月16日

JAおおぞらミニトマト部会協議会

石川県奥能登農林総合事務所

1 ハウス周りの排水溝を整備【湿害や青枯病の防止】

- ① ハウス周りの排水溝を点検し、排水溝に雨水が溜まらないようにする。
- ② ハウス内に雨水の侵入を防止するため、ハウス側面から排水溝にかけマルチ等を敷く。(右の写真参照)



2 温度計と遮光ネットの確認

- ① 生育適温【20～25℃】でミニトマトを栽培管理することと、栽培者の熱中症を防ぐため、ハウス内の中央の見やすい位置に最高最低温度計を設置し、毎朝確認しリセット(初めの状態に戻す)しておく。
- ② 古い温度計は、水銀柱が途切れている場合があるので、確認する。
- ③ 梅雨明け前の7月上旬から、ハウス上部に遮光ネット(遮光率30～35%)を被覆できるよう、準備しておく。
- ④ 夜間の最低外気温が12℃以上に安定したので、夜間もサイド(側窓)を開けて、換気する。

【風雨の強い日はハウスを閉め切り、風が弱まったら病気の発生を防ぐため、すぐにサイドを開ける】

3 かん水

- ① 活着～3段花房開花期までは、萎(しお)れない程度とする。
- ② 晴天時の午前中に、かん水する。また裂果を防ぐため、収穫直後(午前中)に行く。
- ③ 雨天時や曇天時は、過湿による病気の発生を防ぐため、茎葉の萎れが大きい時のみ、かん水する。

4 ホルモン処理(トマトーン)

- ① 着果や果実肥大の促進のため、1花房に5花程度開花した頃を目安にトマトーンを処理する【2度がけはしない】。処理は朝夕に行い、暑い時間帯を避ける。
- ② 若葉や先端部にトマトーンがかかると縮れるので、出来るだけ花だけ処理する。
- ③ 7～8月の高温による着果不良が予想される場合は、トマトーンの濃度 200 倍とし、処理間隔を3～4日に短縮して着果促進に努める。

【ホルモン処理濃度の目安】

15℃以下	100倍	10日間隔
16～20℃	150倍	7～10日間隔
21℃以上	200倍	5～7日間隔



5 下葉かき、わき芽除去等

- ① 病気の発生を防ぐため、晴天時の午前中に、わき芽や収穫段の下葉をかき、通気性を良くする。
- ② つるの誘引は、つるの折れを防ぐため、晴天時の午後に行う。
【主枝先端部(先端より60~90cm)の誘引角度は45度以上とする(あまり横にしない)。】
- ③ 草勢が弱い場合、わき芽除去を控える。また、わき芽を1葉残して摘除することで葉数(葉面積)、生長点を確保することができる。
【残したわき芽の葉から発生する枝は、しばらく伸ばし主枝先端より高くなる前に取り去る】
- ④ 着果数が多すぎると、梅雨明け後の草勢や着果不良の原因となる(特に4~6段花房)ので、1果房あたり20~30果を目安に摘蕾する。

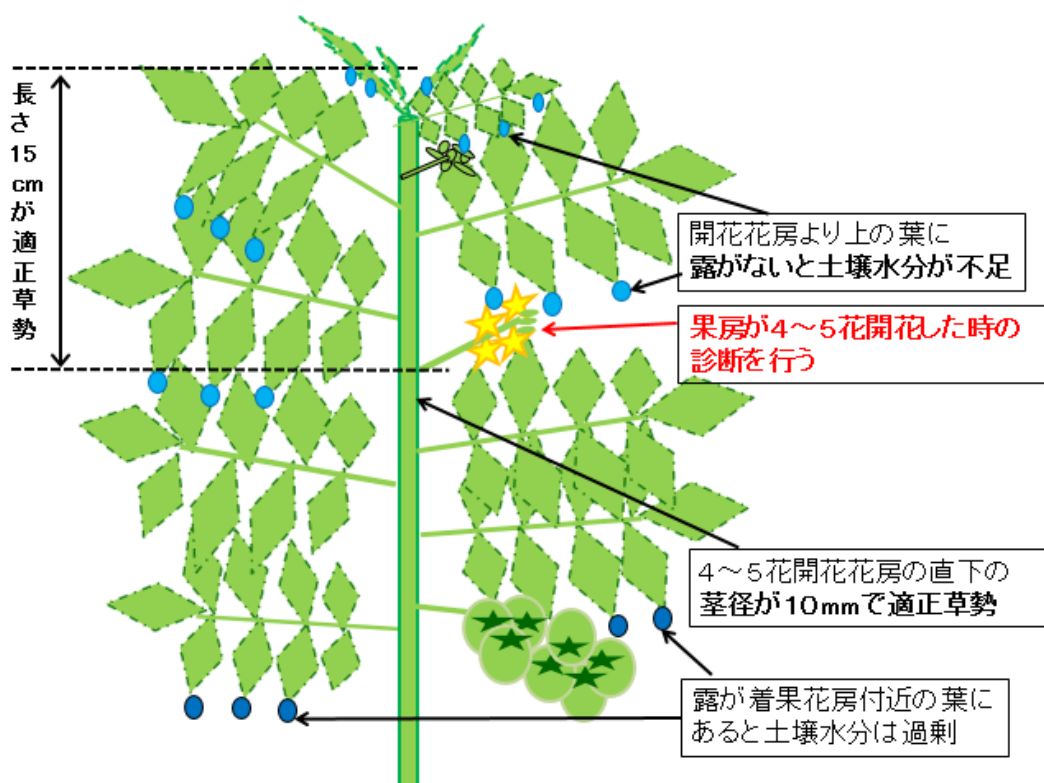
草勢の適正值 ※開花花房とは、4~5花開花した花房を指す

草勢の指標	適正值(管理目標)
開花花房から先端までの長さ	15cm以上
開花花房直下の茎径(茎の細い側)	10mm

※ 右の株だと草勢がかなり弱い！
(タバコの太さ約8mm、長さ約8.5cm)



ミニトマトの草勢および土壌水分の簡易診断(早朝に行う)



6 追肥

- ① 追肥は、草勢を見て、少量ずつ施用する。【いっぺんに追肥しない】
- ② 3段花房開花以降、過繁茂の心配がなければ、遅れずに追肥を開始する。
液肥10号：各段開花始め1回1～1.5kg/a（200倍以上）
有機エイト：奇数段開花初めに1回3kg/a

※1a = 100㎡

7 芯止まり・葉先枯れ対策

- ① 草勢維持のため、誘引の際は主枝先端の角度を45度以上を保つ。
- ② 適切なかん水管理に努めるとともに、3～4段花房開花頃から週に1回程度、カルシウム資材の葉面散布（カルハード500～1,000倍等）を行う。散布の範囲は生長点から30～40cm程度とする。

8 病害虫の発生防除

- ① 適期適切な栽培管理を心掛け、病害虫を予防する。
- ② 病気の発生前に予防農薬（ベルコート水和剤など）を散布する。
- ③ 農薬を使用する際、袋やビンに記載されている使用方法、回数を必ず守る。

9 収穫

- ① 早朝、出来るだけ果実の温度が低い時間帯に収穫し、品質の低下を防ぐ。
- ② カラーチャートを活用し、指定された色で収穫する。
- ③ へた落ち、着色不良、極大、極小、裂果、病害虫被害果は取り除く。

暑い時間帯はハウスに入らず、こまめに水分補給するなど
熱中症予防に注意してください